母は私を抱きしめ、死のうと言った

HPVワクチン訴訟原告女性とその母の闘いを6年間追う

HPVワクチン（子宮頸がんワクチン）接種後の副反応被害を女性たちが訴える「HPVワクチン訴訟」。原告の千葉県白井市の園田絵里菜さん（26歳）と、母の小百合さん（60歳）の6年間を追った。

写真・文／高波 淳

学習会の会場に到着し、冷え切った絵里菜さん（左）の手をさすって温める小百合さん＝2023年2月25日、千葉県柏市。

自宅1階のリビングに置かれたベッド周辺の狭いエリアが絵里菜さん（右）の生活空間だ＝2023年3月27日、千葉県白井市。

学習会の会場で絵里菜さんは冷える手をカイロで温めていた＝2023年2月25日、千葉県柏市。

母の顔は晴れやかにも、悟りを開いた人のようにも見えた。

高校3年のある日。自宅1階で休んでいた絵里菜さんを小百合さんが抱きしめ、こう言った。「ワクチンを打ちに連れて行った私が悪かった。責任を取るから一緒に死のう。そうすれば苦しいこともなくなるし、つらい思いをしなくていい。もう大丈夫だ」。

絵里菜さんは、ほぼ寝たきりで座位を保つのも難しく、床を這い、食事も寝ながら小百合さんに食べさせてもらっていた。学校からは「診断書もないのにこれ以上休まれては困る」などと叱責されてきた。小百合さんは出欠の電話をかけるたびに謝った。介護は限界状態だった。起き上がることも、着替えも、食事もできなくなっていく我が子を見て「この子を残しては死ねない」と思い詰めた。

薬害の根絶を目指す集会でサリドマイド薬害被害者の増山ゆかりさん（右）と交流する絵里菜さん。サリドマイドやエイズ、肝炎などの多くの薬害被害者がHPVワクチン訴訟の原告を支援している＝2017年8月23日、東京・霞が関。

絵里菜さんは、自宅で酸素吸入を行なう在宅酸素療法を治療に取り入れている。「HPVワクチンは私の人生すべてを破壊し尽くした」＝2023年3月27日、千葉県白井市。

酸素を取り入れるためにカニューレを装着し、酸素ボンベ（右）を携え集会に出席した絵里菜さん＝2018年7月15日、千葉県白井市。

接種後、通学中に失神「普通の生徒」でなくなる

HPVワクチン接種後、絵里菜さんには入院が必要なほどの強い生理痛など、経験したことのない重篤な症状が多く出た。病院で診断がつかず、詐病扱いされた。

その後、ワクチンが原因ではないかと指摘する医師に出会った。すると、今度は接種を絵里菜さんに勧めた小百合さんが「私が娘の将来を台無しにした」と激しく自分を責めた。あの日、母が晴れやかにさえ見えたのは、親子で命を絶てば、そうした全ての苦しみから解放されると母が思ったからだろうと絵里菜さんは思う。この出来事の前に、絵里菜さんは夜中に台所で電気を消し、泣きながら皿を洗っている母の姿を見ている。

絵里菜さんは中高一貫校の中学3年時にグラクソ・スミスクライン（GSK）の「サーバリックス」を3回接種して高校に進んだ。接種後、通学中に失神した。文字を書くのが遅れ、授業で板書をノートに書き写すことも、提出物を期限内に提出することもできなくなった。最長で1日18時間眠り続け、起床や登校が困難になる。特進クラスに在籍し2年までは志望大学の合格圏内にいたが、欠席が続き成績は落ちた。「普通の生徒」でなくなった絵里菜さんを多くの教師や生徒が「みんな頑張っているのに、あなただけなぜ頑張れないの」「勝手に病気になったあなたが悪い」「嘘つき」と責めた。「死んだ方が楽かもしれない」と思っていた矢先、母から死のうと言われた。卒業のめどが立たず、3年の秋に通信制高校に転学した。

「ワクチンは有効・安全」被告の製薬会社は主張

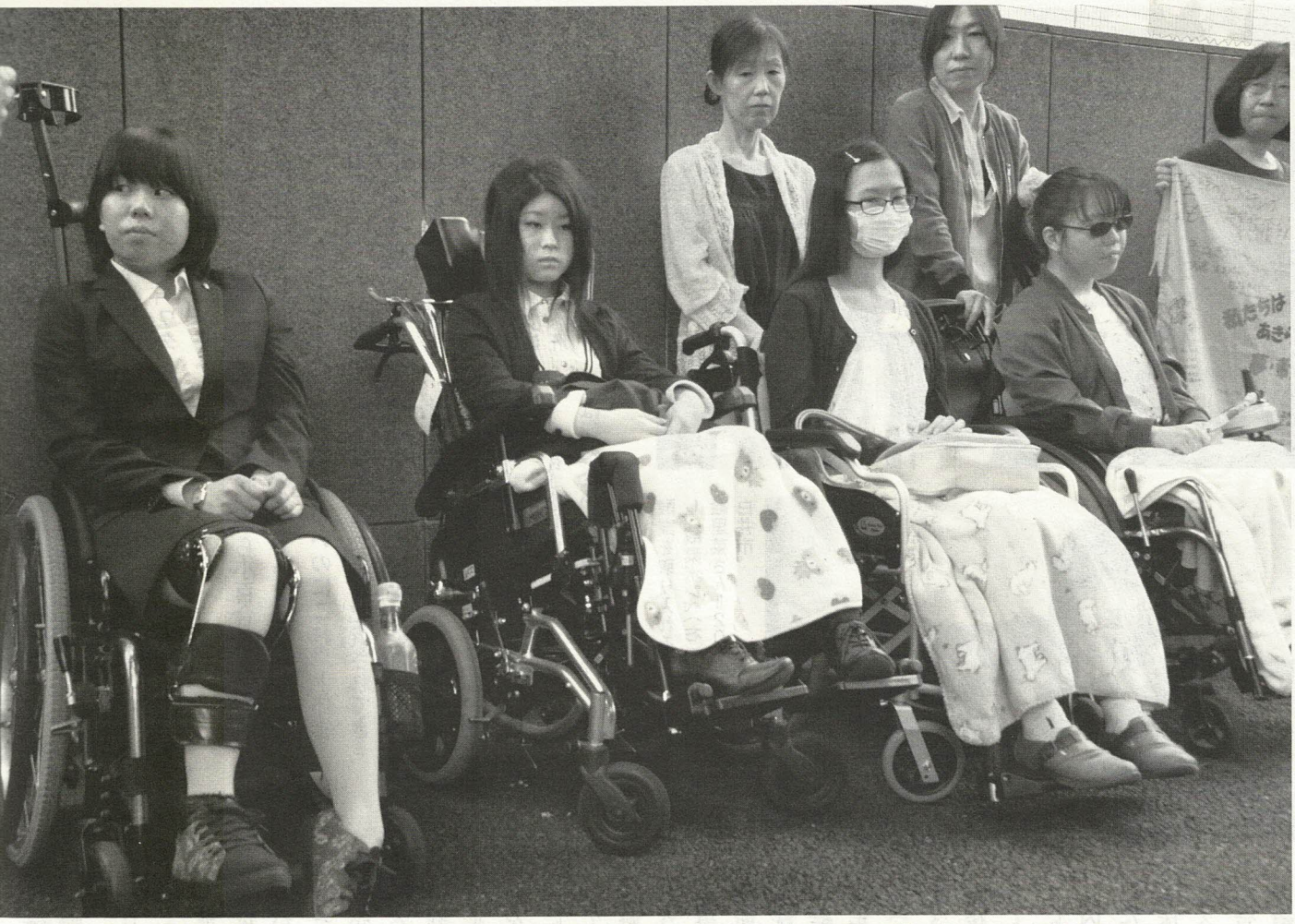
5年前、私がカフェで絵里菜さん、小百合さんとお茶を飲んでいた時、絵里菜さんから体験を打ち明けられた。とっさにスマートフォンで動画を撮影した。

《絵里菜さん》「一緒にこのまま死のうかって、言われて。そのときに私の方が正気に戻った」

《小百合さん》「娘の方が強かったですね。私の方が精神的にすごく参っていました」

《絵里菜さん》「母を殺すことにもなるし自分も死ぬ。その瞬間にすごく身近に死を感じた」「苦しんでるだけじゃなくて、どうにかして生きないと……苦しくても私が生きるしかないだろうと思って」

絵里菜さんは生きることを選択した。「悪いけど、死なない」と母に伝えた。「このままじゃだめだ。何かを変えなきゃ」。自分の症状や治療法について積極的に学び、



裁判の前に、東京地裁前で集会を開いた絵里菜さん（左から2人目）ら原告側。左端は全国原告団代表の酒井七海さん＝2017年5月10日。

「苦しんでるだけじゃなくて、どうにかして生きないと」

学習会も開いた。小百合さんが車いすを押して活動を支えた。最近、体験を自身で語り始めた。

現在、通信制大学3年の絵里菜さんは「私は嘘つきではないとわかってほしい」と実名公表して闘う。就労し、結婚や出産もし始めた級友たちに「取り残される」と焦った。副反応のつらい症状を学校で理解されず「ごみ屑（くず）」と蔑（さげす）まれ、自分には生きる価値がないと思い苦しんだ。だが、主治医に「園田さんは10年かけて座位を保てるようになった。それだけで十分だよ」と言われ、自分を肯定できるようになった。

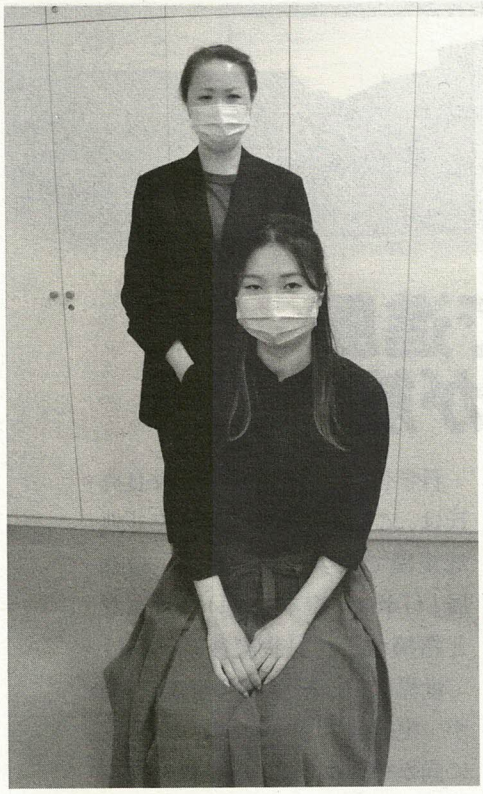
「裁判で、両親に世話をかけずに自立して生きられるような解決の兆しが見えるとうれしい」。小百合さんは「多くの症状を抱えて生きる娘の将来へのサポートに努めたい」と話す。

4地裁で約120人が争う訴訟は5月18日の証人尋問（東京地裁）で、池田修一医師が患者らの症状はワクチンが原因と証言。被告のGSKとMSDは「ワクチンは有効・安全で原告らの症状と関連性はない」と一貫して主張する。被告の国の加藤勝信厚労相は「訴訟の当事者なのでコメントは差し控える」としている。

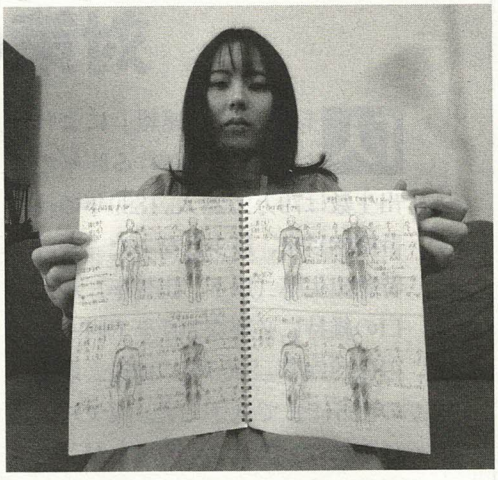
たかなみ　あつし・フリージャーナリスト

HPVワクチン訴訟 闘う女性たち

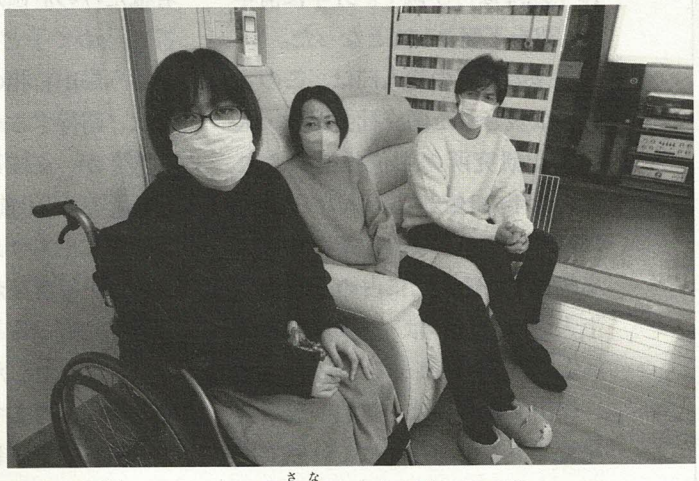
「HPV ワクチン訴訟」の原告４人。
闘う女性たちの姿を写した。



仕事を失う
梅本美有（みゆう）さん（25歳）　福岡県
ワクチン接種後、全身の痛みや吐き気、倦怠感などに苦しんだ。朝起きられなくなり、体もきつく高校への通学が難しくなった。3年の4月に単位制の高校に転学した。高校卒業後、約1年の自宅療養を経て大学に進学。卒業して市役所に就職したが、体調が悪く、辞職した。痛みがあった場所や強さを人体図に書き込む「痛み日記」をつけている＝2023年1月22日



「お母さん」探し続ける
佐藤奈津美（なつみ）さん（25歳）　北海道
ワクチン接種後、記憶障害などの症状が出た。漢字が書けなくなり、1から10まで数を数えることも、計算もできなくなった。スマホがないと今日の日付もわからない。長い間、母の美也子さん（50歳）のことを母親だとわからなくなっている状態だ。目の前にいる母に向かって「お母さんがいなくなった。一緒に探してほしい」と訴えた＝2022年10月15日



痛みに耐える日々　平原沙奈（さな）さん（25歳）　埼玉県
ワクチン接種後、全身が痛んだ。大きな力でねじって引きちぎられるような痛みに「助けて、ママ」と大声で叫んだ。寝る前には痛み止めを飲み、湿布を体に貼った。「痛みがひどく、朝目覚めたくない、死にたいと思った。一日一日を耐えて過ごすだけで精いっぱいで、将来のことが考えられない」。父・賢志さん（61歳）、母・明美さん（60歳）と＝2022年1月15日

活発な生活、一変　望月瑠菜（るな）さん（24歳）　山梨県
小学6年で児童会長と野球チームのキャプテンを、中学でも生徒会長を務めた。ワクチン接種後に生活は一変。体のあちこちが痛み、高校1年の夏に歩けなくなり登校を一時中断した。体調が悪く、先の見通しが立たないため、進学や就職の進路を決めることができず、「級友たちから取り残され、つらかった」。母の千鶴さん（52歳）と学習会で＝2023年1月28日